

正論 1981.8

〈新・人物コラム〉

第二臨調の専門委員

公文俊平



イブシ銀

編集部のあいだでは著者としての公文俊平の人氣は高い。ひとたび仕事上の付き合いができる、たいがい、ファンになるようである。何人かの編集者に公文觀をきいてみた。「人柄がいい。約束はきちんと守ってくれ。それでいて、原稿料が安い」などときびしいことは絶対にいわない。親切で、編集者を対等な人間として扱ってくれる」「やはり人柄。東大教授のなかには氣取つたり威張つたりする人がかなりいるが、公文さんは裏表がなく謙虚だ」「仕事が確かだ。ハツタリがなく、一度引き受けてもらつたら、もう安心だ。手のかからない著者だ」

欠点は？

「強いていえば、地味で、派手さ不足というところか。それに書くものが少し、むずかし」
「真面目すぎて面白味に欠ける」
「今後の可能性は？」
「地味で堅実で本格的なところが、これらの時代に受けるのではないか」
「公文さんの持ち味はイブシ銀。金ピカにはなれないし、またならない方がいい。本格的な著作に取り組んでほしい。政治に深入りしない方がいい」
最近の活動を外野からみると、政治的・政策的な面での活躍が目立つ。
活動の主な舞台を研究室の外側へ移したかのようにある。この点に関して、編集者の中

には、もっとアカデミックな仕事に集中してほしいという希望があるが、私は必ずしもそうは思わない。現実的な政策的活動分野の方が真価が発揮できるのではないか——そんな氣がする。

ハードルを越えて

経歴をみてみよう。昭和十年一月二十日、高知県生まれ。父は小地主。裁判所につとめていたが、昭和二十年フイリピンで戦死。そして農地改革。戦後の混乱は誰もが経験したものだといえ、夫を失つた母親と十歳を頭とする子供四人の家庭にとって生活はきびしかった。しかも、その中で、長男の彼は一家の支柱でなければならなかった。こうした境遇と体験が、彼の思考をマルクス主義に近づけた。

昭和二十八年春、高知県の名門校、土佐高卒。同時に東大教養学部文工に入學。マルクス経済学の勉強を志す。当時は「戦後進歩思想」が華やかな時代で、マルクス経済学者への道は、文科系秀才の一種のエリートコースになっていた。

昭和三十二年経済学部卒業。大学院へ進學し、中野正、玉野井芳郎らの指導をうける。昭和三十七年から三年間、米インジアナ大

学大学院(経済学部)およびソ連東欧研究所に留學。主として、経済体制論に取り組む。この間、独力でマルクス主義を卒業。昭和四十年、東大教養学部助手に就任するため帰国。四十一年経済学の専任講師、四十二年東大助教授。

さらにこの年からカールトン大学経済学部客員准教授としてカナダに招かれる。大学紛争時に一時帰国するが四十六年まで滞在する。この間社会システム理論に取り組む。四十八年国際関係論に移り、経済学の枠を突破して社会科学総合化の試みにチャレンジしていく。五十三年教授。

この経歴でわかるように、学者としてはエリートそのものである。順風満帆といって過言ではない。しかし、思想歴、研究歴の面では単純とはいえない。彼は、東大教授になるまで二つのハードルを越えなければならなかった。

第一はマルクス経済学、第二は既存の縦割りの社会科学の体系であった。第二のハードルを越える時、彼にきっかけを与えたのはポールディングである。彼の訳した『経済学を越えて』は、一時、経済学のベストセラーにもなっている。

力作を著している。「転換期の世界」(講談社、昭和五十三年)、「社会システム論」(日本経済新聞社、昭和五十三年)、「文明としてのイエソ社会」(共著、中央公論社、昭和五十四年)などである。いずれも既存の社会科学の理論的枠組みを突破しようとする意欲的な試みである。

新現実派

社会科学の総合化をめざす研究は着実に前進していくようにみえたが、しかし、彼は研究室でのアカデミックな仕事にとどまっていなかった。五十三年末大平内閣ができた頃から、彼の研究対象は現実的政策課題に向かっていく。

この転換のきっかけとなったのは前首相・故大平正芳との個人的付き合いだったようだ。大平は、彼と二人の盟友(佐藤誠三郎・東大教授と香山健一・学習院大学教授)が大平に引き合わせたのだった。大平と二人の学者の間の信頼関係は厚かった。この付き合いから生まれ出たのが、大平首相の私的諮問機関「政策研究会」である。

政策研究会には数多くの学者、官僚が集められたが、中核となったのは、公文と彼の盟友たちであった。その中には、竹内靖雄(成蹊大教授)、志水

速雄(東京外語大教授)、中嶋嶺雄(東大教授)もいる。

これらの学者に共通するのは、①昭和十年前後の生まれで、同じ時代に似たような学生生活を送つたこと、②昭和二十年代後半から三十年代前半にかけてマルクス主義を体験し、昭和三十年代後半に自分の力でこれを克服していること、③理想やイデオロギーの限界を体験的に知っており、非常に現実的で柔軟な思考様式をもっていること、④政治が好きで、現実感覚が鋭いこと、⑤個人的野心がないこと——などである。私は、しばらく前から、彼らのことを、ひそかに、「新現実派」と呼ぶことにしてきた。もちろん、「派」といえるような組織が存在するわけではない。あえていえば一種のムードであり傾向である。

公文はこの「派」の重鎮である。大平首相の急死により「新現実派」は政権の中核から離れたけれども、政権が有能な彼らをいつまでも放つばらかしくしておくとは考えられない。

将来のことはともかくとして、この人は今、第二臨調の専門委員として、奮闘中である。(評論家・森田 実)